

アマルティア・センによる『道徳感情論』解釈の、批判的検討*

Rethinking Amartya Sen's Interpretation on *the Theory of Moral Sentiments*

菅 隆 彦
Takahiko Kan

1. 序論

本論文はアマルティア・センによる『道徳感情論』解釈を批判的に検討する。『道徳感情論』においてアダム・スミスは共生の基礎となる社会秩序の形成について論じた。スミスの論じた社会秩序は人々の相互の同感に基づく。同書は様々な観点から解釈され、その現代的意義が見出されてきた。その中でも、センは経済倫理学の観点から同書を解釈し、自身の思想と整合する先駆的研究として高評価した。顕著な業績を持つセンの高評価により、同書の現代的意義が再認識された。

しかし、センによる同書の解釈が学説史研究の観点からして不合理であることが、中立的な観察者についての解釈など、一部の解釈に関して指摘されてきた。本論文は先行研究を発展させ、センの『道徳感情論』解釈を全体的に批判検討する。これにより同書の現代的意義が適切に評価される。加えて、センの解釈の不合理性を材料として、センの思想の特色を明らかにすることができる。

本論文は以下のように構成される。第2節では、本論文の議論で頻出する重要概念である、中立的な観察者について説明する。第3節ではセンによる『道徳感情論』解釈を三つに分類して説明する。第4節ではセンによる同書の解釈を批判的に検討する。第5節ではセンの解釈に誤りが生じた原因を考察する。第6節では、前節までの議論をまとめ、さらなる研究の必要性に言及する。

2. 『道徳感情論』と中立的な観察者

『道徳感情論』においてスミスは共生の基礎となる社会秩序の形成について論じた¹。同書における基礎的な概念が、「同感」(sympathy)²である。同感とは、何らかの事柄に際して他者が抱く感情に、主体が接する際に生じる。同感とは、主体が想像の中で当事者の境遇に身を置き、当事者と同じ感情を共有することである。もし自分の感情が他者に同感されたとすれば、それは自分の感情が他者に一定程度正しいと認められたことを意味する。この意味での同感を、スミスは「是認」(approbation)と呼ぶ。社会秩序が形成されるためには、感情のみならず言動が重要になるわけだが、言動に対してもまた是認は行われる。ある言動を是認できるかは、その言動に伴う感情(意図)を是認できるかによって決まる。例えばある他者が暴力をふるっていたとすれば、その暴力が是認できるかは暴力に伴う感情(意図)に同感できるかによって決まる。正当防衛の意図の暴力で

あれば是認されやすいであろうし、悪意に満ちた暴力であれば是認されづらいであろう。

他人に是認されるような言動のみを人々がとるとすれば、何らかの社会秩序が形成されるであろう。しかしスミスは人々がただ他者に是認される言動をとるだけでは、十分な社会秩序が形成されないとした。他者といっても様々な価値観の人間が存在するのであり、言動がある一人に是認されたとしても、その言動は社会秩序を破壊してしまうような言動かもしれない。十分な社会秩序が形成されるには、「中立的な観察者」(impartial spectator)³ という想像上の観察者に是認されるように、人々が言動をとる必要がある。中立的な観察者は、言動が取られる場面・状況をよく理解しており、当事者達から離れた客観的立場に立つ。中立的な観察者は、あくまで想像上の観察者であり、人々が様々な経験を通して学ぶことにより心中に形成するものである。中立的な観察者の影響力は大きく、「この内部の裁判官に相談することによってのみ、われわれは、自分自身に関連するどんなものごとでも、その本来の形と大きさにおいて、みることができ」る (TMS: III.3.1)⁴。つまり、物事を正しく判断するには、中立的な観察者と同じ視点に人々が立つことが必要である。中立的な観察者に是認されるような言動を人々がとるということは、人々が客観的な立場から見て問題の無い言動がとれていることを意味する。このような状況になって初めて、スミスは社会秩序が形成されるとした。スミスの社会秩序論において中立的な観察者は非常に重要な概念と言える⁵。

3. センによる『道徳感情論』解釈

センは数多くの著作で『道徳感情論』へ言及している。同書を単に紹介するような簡単な言及もあれば、同書の内容に深く踏み込んだ詳細な言及もある。後者の詳細な言及を読み解くことで、本論文はセンによる『道徳感情論』解釈を把握する。センの解釈は大きく三つに分類することができる。

分類1：中立的な観察者についての解釈

セン (2011, Chapter6) は、ロールズ (2010) が提唱した政治的判断についてのアプローチを批判し、それとは異なるより望ましいアプローチが必要だと主張する。センによれば、ロールズのアプローチ⁶は集団が共有する偏見を克服することができず、中立的な政治的判断のアプローチとしては不適切である。ロールズのアプローチは集団内の利害関心のみが考慮されるのであって、集団外の人間の利害関心は考慮されない。

ロールズのアプローチに代替するアプローチの候補としてセンが提示するのが、『道徳感情論』における中立的な観察者のアプローチである。センによれば、中立的な観察者のアプローチはロールズのアプローチとは異なり、集団の内部からの見方だけではなく外部からの見方を判断に取り入れることができる⁷。スミスによれば、自身の言動の適宜性を判断するには「自分たちを、いわばわれわれの自身の自然の地位から移動させて、われわれ自身の諸感情と諸動機を、われわれから一定の距離があるものとして見るように努力」しなくてはならない (TMS: III.1.2)。このように努

力することで、集団外の人間の利害関心を考慮した政治的判断が可能になると、センは主張する。

別の観点からも、センはロールズのアプローチを批判する。センによれば、ロールズのアプローチは理想的な判断を特定するためのものであり、理想が実現困難である状況においては役に立たない。このような状況は現実において頻繁に発生するであろうし、このような困難な状況でこそ、中立的な判断が求められるであろう。理想が実現困難な状況であれば複数の実行可能な選択肢を比較することが必要となるが、センによれば、この比較はロールズのアプローチでは行うことができない。一方で、中立的な観察者のアプローチを用いれば、複数の実現可能な選択肢を比較することができ、理想が実現困難な状況においても役に立つことが期待できると、センは主張する。

分類 2：自己利益追求以外の動機

セン（2002）は、スミスが自己利益追求（利己主義）の権化であるとする、通俗的な解釈が誤りであると主張する⁸。その主張の根拠は『道徳感情論』中の記述である。同書においては人間が自己利益追求ばかりするとは記述されていなし、自己利益追求ばかりすべきとも記述されていない。スミスは自己利益追求ではなく同感を明らかに重視していた。スミスは同感が基礎となって社会秩序が形成される過程を明らかにした。また、スミスは人間愛・正義・寛大さ・公の精神を他者に役立つ資質として奨励したが、これらの資質は自己利益追求とはまったく異なる。たしかに、通俗的な解釈の賛同者が強調するように、スミスは『国富論』において自己利益追求に言及した。しかし、それは市場取引を説明するためであって、自己利益追求のみを奨励していたわけではない。このことは『道徳感情論』を「偏見のない目」で読めば明らかであると、センは主張する。

分類 3：理性的思考

セン（2011）は理性的思考の役割を重視しており、理性的思考が感情やアイデンティティに優越すると主張する⁹。この主張の根拠付けの一つとして、センは『道徳感情論』を位置づける。同書における重要概念である「良俗の一般的諸規則」（general rules of morality）は、経験に基づいた理性的思考によって形成される。これはセンによれば理性的思考の重要性の一つの根拠となっている。加えて、『道徳感情論』における慣習論では既存の慣習を理性的思考によって精査することの重要性が示されていると、センは主張する¹⁰。スミスは、高度に文明が発展していたギリシャの都市国家でさえも、嬰兒殺しの惨い慣習が存在していたことを指摘した（TMS：V.2.15）。スミスによれば慣習は必ずしも正しいわけではなく、正しさ¹¹を本質的に決定するのは同感の原理である。したがって慣習の正しさを時には疑う必要があるが、それはセンによれば理性的思考によって行われる。

4. センによる解釈の批判的検討

前節ではセンによる『道徳感情論』解釈を三つに分類し、それぞれについて説明した。本節では

センによる解釈を学説史研究と独自の考察に基づいて批判的に検討する。

分類 1：中立的な観察者

センはロールズのアプローチを批判し、その代替として中立的な観察者のアプローチを提唱する。しかし、中立的な観察者についてのセンの解釈には問題があり、中立的な観察者のアプローチの提唱には説得力が欠ける。

第一に中立的な観察者のアプローチでも集団外部の視点を無視してしまう可能性がある。このことはGolemboski (2018) によって詳細に指摘された¹²。Golemboskiによれば、中立的な観察者は特定の集団の文化に制約されてしまう。中立的な観察者は、ある特定の社会で得られた道德規範の投影であり、その道德規範に疑義を呈したり批判したりすることはできない。このことは『道德感情論』中の記述から裏付けられるし、学説史研究においても同様の見解が存在する¹³。

Golemboski (2018) が言及しなかった理由からも、中立的な観察者のアプローチが集団外部の視点を無視しうることがわかる（菅，2020a）。中立的な観察者は人々が他者の判断（感情）を観察することで形成されるが（TMS：III.1.3），当然その観察範囲は物理的に限定されている。観察することのできない集団外の視点を、中立的な観察者は無視しう。また、『道德感情論』第六部の慈恵論において、他者との距離によって同感のしやすさが変わることをスミスは指摘した。人間は自分に距離的・心理的に近い他者には同感しやすいが、遠い他者には同感しづらい。したがって自分が属さない遠い集団に対しては、人間は十分に配慮することができない。このような限界を持つ人間達が形成する中立的な観察者もまた、遠い異集団の視点を無視しう。加えて道德感情の腐敗（TMS：I.iii. 3. 全体）の問題からも、中立的な観察者が集団外部の視点を無視しうることがわかる。道德感情が腐敗した人間が社会に一定数存在することから、そのような人間の集団は腐敗した中立的な観察者を形成する可能性がある。腐敗した中立的な観察者は、腐敗していない集団の視点を無視してしまうから、ロールズのアプローチと同様の問題に陥る。

第二に、センは政治的判断において選択肢の比較を重要視しているが、中立的な観察者は選択肢の比較に特に適しているわけではない。むしろ、中立的な観察者は中立的と言う意味で理想的な判断を行う想像上の存在であり、理想的な判断の特定に適している。もちろん、センの言うように、実行可能な選択肢を比較することもできるであろう¹⁴。選択肢が限られているという前提条件の下で、どの選択肢が中立的な観察者の見方から優先されるのかを考えるのである。しかし同様の比較はロールズのアプローチによっても行うことができる。選択肢が限られているという前提条件を課して、ロールズのアプローチを用いれば良い。加えて、選択肢の比較を重視するというのであれば、中立的な観察者のアプローチではなく他のアプローチを採用することもできる。センが専門とする社会的選択理論には選択肢の比較に適したボルダール等手法が存在する。比較を重視することは、中立的な観察者のアプローチを採用するための積極的な理由とはならない。

これらの二つの問題点から、『道德感情論』の現代的意義はセンが主張するよりも小さいことがわかる。しかしこのことは同書の意義が皆無であることを意味するわけではない。センが主張する

ように、中立的な観察者のアプローチがロールズのアプローチよりも優れているのは確かである。センの解釈の問題点は、中立的な観察者のアプローチを過大評価している点にある。

分類 2：自己利益追求以外の動機

センが主張する通り、スミスが自己利益追求の権化であるとする通俗的な解釈は誤りである。しかし実は『道徳感情論』によれば人間は通俗的な解釈とは異なる意味で自己利益追求に走っている。人間は中立的な観察者に是認されるように行動するとされているが、このように是認されることは喜びであり自己利益なのである（TMS：III.2.3）。ただし、中立的な観察者に是認されるような行動は、低俗的な自己利益の追求とは明確に異なる。中立的な観察者に認められるということは行動の適切さを認められるということであるが、低俗的な自己利益の追求は適切さを認められにくいはずだ。中立的な観察者に是認されるように行動することは、言わば高次の自己利益追求と言える。このことをセンは見逃している。

中立的な観察者に是認されるように行動することが高次の自己利益追求と言えることは、『道徳感情論』の現代的意義を大きくする。経済学では、システムが主体のインセンティブに整合的であることが、重視されている。どんなに理想的な帰結の実現を目指したシステムであっても、インセンティブに整合的でなければその帰結の実現可能性は低くなってしまう。スミスは『道徳感情論』において社会秩序のシステムを描いたわけであるが、そのシステムの中では人間が中立的な観察者に是認されることが必要である。中立的な観察者に是認されるように行動することは人々の高次の利益追求であり、インセンティブに整合している。スミスが描いた社会秩序のシステムは主体のインセンティブに整合するから、その意味で望ましいシステムと言え、現代においても通用する性質を持っている。

分類 3：理性的思考

理性的思考が重要である根拠としてセンは『道徳感情論』を持ち出す。しかし同書においては書名の通りむしろ感情が重要視されている。良俗の一般的諸規則（以下、一般的諸規則）が経験に基づいた理性的思考によって形成されることを、センは理性的思考の重要性の一つの根拠とする。たしかに一般的諸規則は経験を振り返るというある種の理性的思考を伴って形成される。しかしスミスはむしろ形成過程における感情の役割を重視している（TMS：III.4.8-9）。例えばある犯罪を禁止する一般的規則があったとすれば、それが形成されるときに最重要の役割を果たすのは犯罪行為に対する嫌悪感である。一般的諸規則の形成において最重要なのは人間が自然に抱く感情であり、理性的思考はその経験を振り返る際に役立つに過ぎない。理性が重要である根拠として、センが一般的諸規則を持ち出すことは、不適切と言える。

センは理性的思考が重要である根拠として『道徳感情論』における慣習論を持ち出すが、これもまた、スミスの主張とは整合しない。たしかにスミスは既存の慣習を疑う必要性があったとした。慣習と中立的な観察者の判断が一致しない場合があるが、スミスによれば正しいのは中立的な観察者

の判断の方である（TMS：V.2.1）。不一致に気づいて中立的な観察者の判断を優先することが必要であるが、そのために重要なのは理性的思考ではなく感情である。中立的な観察者の判断は人々の自然な感情を基としているから、慣習との不一致に気づくことは感情との不一致に気づくことである。不一致があれば感情との違和感をただちに覚えるはずであり、理性的思考のように時間がかかることはない。

センの解釈のこれらの問題点は、『道徳感情論』の現代的意義を評価するにあたって、影響を及ぼさないとされる。理性的思考を重視しているか感情を重視しているかの違いは、現代において特に重要な差異とは見做されていない。

5. センの解釈が生じた原因

前節で述べた通りセンの『道徳感情論』解釈にはいくつかの問題点がある。本節ではそれらの問題点がなぜ生じたのかを考察する。

分類1：中立的な観察者

中立的な観察者についてのセンの解釈には問題があり、ロールズのアプローチの代替としての中立的な観察者のアプローチの提唱には説得力が欠ける。センの解釈に問題が生じるのは、センが理想とするアプローチと中立的な観察者とが実は異なるからではないだろうか。それにもかかわらず、センは自身が理想とするアプローチを中立的な観察者のアプローチとししばしば誤って呼んでしまっている。センが理想とするアプローチと中立的な観察者とが異なることは、セン自身の記述から推測される。『『公平な観察者』というアイデアを拡張することによって得られる正義論』（セン，2011，p. 207），という記述からは、中立的な観察者とは異なる、それを拡張したアプローチについて、センが論じていることがわかる（引用文中の「公平な観察者」は中立的な観察者のことである）。しかし、その他の記述においては、センが理想とするアプローチと中立的な観察者との区別が明確ではない。

仮にセンが自身の理想とするアプローチと中立的な観察者とを明確に区別していないとすれば、その要因は何であろうか。その要因は自説の正当化であるとするのが、本論文の仮説である。影響力のある古典を自説の正当化のために援用することはしばしば見られることである。センがこの手法を取ったとしても何ら不自然ではない。自説と援用する古典との一致度が高い方が正当化の効果は高くなる。正当化の効果を高めるために、センは両者を区別しなかったのではないだろうか。

分類2：自己利益追求以外の動機

中立的な観察者に是認されるように行動することは言わば高次の自己利益追求と言えるが、このことをセンは見逃している。見逃しているのは、センが自己利益追求と規範的行動とを明確に区別したいからではないだろうか。Sen（1985）は、自己利益（自己目標選択）を追求しないという意

味での一種の規範的行動が、社会的ジレンマの根本的解決の唯一の手段になるとして、そのような規範的行動を重要視している¹⁵。別の捉え方をすれば、センによれば、自己利益追求こそが社会的ジレンマの要因であり、その追求をしないことが社会的ジレンマの解決に不可欠である。加えてSen (1977) は主体が自己利益の追求に走るとする主流派経済学の間人観を「合理的な愚か者」(rational fool) と呼び痛烈に批判した。自己利益追求を厳しく批判するセンの見解に立てば、自身が高評価する中立的な観察者が自己利益追求と整合すると見做すことは、避けたいはずである。現にセンは中立的な観察者と密接に関連する一般的諸規則を自己利益追求とは明確に区別している¹⁶。センの誤った解釈には、自己利益追求と規範的行動とを明確に区別するという、センの思想の特色が現れている。これは学説史研究的に興味深い発見である。

分類 3：理性的思考

センは理性的思考が重要である根拠として『道徳感情論』を持ち出すが、同書においては書名の通りむしろ感情が重要視されている。センはなぜこのように誤った解釈をするのだろうか。その要因を自説の正当化とするのが、本論文の仮説である。分類 1 についての本節における考察で述べたように、自説の正当化のために影響力のある古典を援用することはしばしば見られることである。しかし、理性的思考についてのセンの解釈は、スミスの主張とは正反対になってしまっている。これにはセンの思想の特色が現れており、学説史研究的に興味深い。スミスの主張と正反対の解釈をしてしまうほどに、センが理性的思考を重視していることがわかる。

6. 結論

本論文は先行研究を発展させセンの『道徳感情論』解釈を批判的に検討した。中立的な観察者・自己利益追求以外の動機・理性的思考の三分類についての、センの解釈に焦点を当てて、その誤りを指摘した。これにより同書の現代的意義が新たに適切に評価された。センは中立的な観察者の解釈においては『道徳感情論』を過大評価し、自己利益追求以外の動機の解釈においては同書を過小評価している。センは理性的思考の解釈においては同書を過大評価も過小評価もしていない。またセンの誤った解釈を材料としてセンの思想の特色が明らかになった。センの『道徳感情論』解釈には、自己利益追求と規範的行動とを明確に区別するという特色と、理性的思考を重視するという特色が、現れている。本論文はセンの『道徳感情論』解釈を批判的に検討したわけだが、スミスのもう一つの代表作である『国富論』についてのセンの解釈を批判的に検討する余地がある。その検討結果を本論文における検討結果と一体的に考察することにより、より適切にスミスの著作の現代的意義を評価し、センの思想の特色を明らかにすることが期待される。

参考文献

外国語文献

- Fleischacker, S. (2011). Adam Smith and cultural relativism. *Erasmus Journal for Philosophy and Economics*, 4 (2), 20–41.
- Forman–Barzilai, F. (2010). *Adam Smith and the circles of sympathy : Cosmopolitanism and moral theory*. Cambridge University Press.
- Golemboski, D. (2018). The impartiality of Smith's spectator : The problem of parochialism and the possibility of social critique. *European Journal of Political Theory*, 17(2), 174–193.
- Rasmussen, D. C. (2014). *The pragmatic enlightenment*. Cambridge University Press.
- Sen, A. (1977). Rational fools : A critique of the behavioral foundations of economic theory. *Philosophy & Public Affairs*, 6 (4), 317–344. 大庭健・川本隆史訳 (1989)『合理的な愚か者』(120–167) 勁草書房。
- Sen, A. (1985). Goals, commitment, and identity. *Journal of Law, Economics and Organization*, 1 (2), 341–55. 若松良樹・須賀晃一・後藤玲子監訳 (2014)『合理性と自由(上)』(第5章) 勁草書房。
- Sen, A. (2002). Open and closed impartiality. *The Journal of Philosophy*, 99(9), 445–469. セン・後藤 (2008)『福祉と正義』(第5章) 東京大学出版会。
- Sen, A. (2010). Adam Smith and the contemporary world. *Erasmus Journal for Philosophy and Economics*, 3 (1), 50–67.
- Smith, A. (1982). *An inquiry into the nature and causes of the wealth of nations* (Vols. 1–2). (R.H. Campbell, & A.S. Skinner, Eds.). Liberty Fund. (Original work published 1784) 水田洋・杉山忠平訳 (2000)『国富論』(1–4) 岩波書店。
- Smith, A. (1982). *The theory of moral sentiments* (D.D. Raphael, & A.L. Macfie, Eds.). Liberty Fund. (Original work published 1790) 水田洋訳 (2003)『道徳感情論』(上–下) 岩波書店。

日本語文献

- 菅隆彦 (2019)「『道徳感情論』の現代経済学的再解釈－アマルティア・センによる解釈への批判と、進化経済学を用いた再解釈－」博士論文 (東北大学)。
- 菅隆彦 (2020a)「アマルティア・センの『道徳感情論』解釈－中立的な観察者の中立性－」『TERG Discussion Paper』, 435, 1–21。
- 菅隆彦 (2020b)「アマルティア・センの『道徳感情論』解釈－良俗の一般的諸規則とコミットメント－」『TERG Discussion Paper』, 434, 1–18。

- セン・アマルティア著／徳永澄憲・青山治城・松本保美訳（2002）『経済学の再生』麗沢大学出版会。
- セン・アマルティア著／細見和志訳（2003）『アイデンティティに先行する理性』関西学院大学出版会。
- セン・アマルティア著／池本幸生訳（2011）『正義のアイデア』明石書店。
- ロールズ・ジョン著／川本隆史・福間聡・神島裕子訳（2010）『正義論』紀伊國屋書店。

脚注

*本研究は、公益財団法人上廣倫理財団から、二つの研究助成を受けた。「上廣倫理財団令和二年度研究助成（継続助成）」と「上廣倫理財団令和元年度研究助成」であり、研究課題名はいずれも「アマルティア・センによる『道徳感情論』解釈の批判的検討」である。これらの助成の成果として上廣倫理財団に提出された論文に若干修正を加えたものが、本論文である。

¹ 本論文の目的はセンの『道徳感情論』解釈の批判的検討であり、同書についての基本的知識を前提としている。よってスミスの社会秩序形成論について詳細な解説を施すことは回避する。そのような解説には、例えば菅（2019）における解説がある。

² Sympathyは共感と訳されることもある。

³ Impartial spectatorは公平な観察者と訳されることもある。

⁴ これ以降、『道徳感情論』から引用する際には、TMSと記したうえでグラスゴウ版のパラグラフ番号を付し引用元を示す。訳文は水田訳を利用する。

⁵ しかし、スミスの社会秩序論においては中立的な観察者だけでなく、後述する「良俗の一般的諸規則」が不可欠である（TMS：III.4.全体）。

⁶ このロールズのアプローチでは、無知のヴェールの下で政治的判断が行われる。なお本論文の議論の対象はセンの『道徳感情論』解釈であるから、ロールズのアプローチの詳細については立ち入らない。

⁷ Sen（2002）、Sen（2010）でも同様の主張が展開されている。

⁸ Sen（2010）、Sen（2011）でも同様の主張が展開されている。センは著名な経済学者の名を挙げつつ通俗的な解釈を手厳しく批判する。

⁹ 本論文では感情と理性の関係性に関する、センの主張について論じる。理性とアイデンティティの関係性に関するセンの主張については、セン（2003）を参照せよ。

¹⁰ Sen（2002）でもスミスの慣習論に言及している。

¹¹ 判断の正しさは、『道徳感情論』においては「適宜性」と呼ばれている。

¹² Forman-Barzilai（2010, pp. 166-92）、Fleischacker（2011, pp. 26-31）、Rasmussen（2014, p. 50）もまた、センとは異なる仕方で中立的な観察者を解釈する。

¹³ Golemboski（2018）の指摘の詳細については、菅（2020a）を参照せよ。

¹⁴ なお、中立的な観察者のアプローチを用いた選択肢の比較について、センは具体的な手法を提示していない。

¹⁵ このセンの見解及びそれに対しての批判については、詳しくは菅（2020b）を参照せよ。

¹⁶ 菅（2020b）は一般的諸規則が実は高次の自己利益追求であることを論証している。